

氏 名	今 井 幸 雄 いま い ゆき お
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 169 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	医 学 研 究 科 内 科 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	Studies on So-called Banti's Syndrome (いわゆる Banti 症候群に関する研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 脇 坂 行 一 教 授 前 川 孫 二 郎 教 授 三 宅 儀

論 文 内 容 の 要 旨

目 的

Banti 病の独立性実在性に対しては異論が多く、一般に本症は臨床的一症候群として扱われて来た。さらに近年欧米においては本症候群を門脈圧亢進症として扱い、Banti 症候群の名称は抹殺されているが、本邦においては本症候群の存在が今日なおみとめられている。著者はとくに本邦における Banti 症候群の実在性を吟味し、その本体を解明する目的をもって、臨床的に本症類似疾患について、とくに肝および脾の病理組織学的解析を行ない、また病因論的考察に基いて実験的検討を試みた。

成 績

第一報において剖検例および生検例の臨床病理学的検討を行なった。すなわち、先ず過去10年間に本症候群の臨床診断の下に剖検された12例について、肝および脾の組織像を再検討した。その結果2例は明らかに壊死後性肝硬変の組織像を示したが、他の10例は門脈域における軽度ないし中等度の多小葉性線維症であった。一方、脾組織像はこの両群間に決定的相違はみとめなかった。

次に生検例としては肝生検および脾生検を施行し本症候群と考えられた18例および対照として肝炎、肝硬変と診断された18例と肝外門脈系疾患と診断された5例を検討した。

その結果本症候群と考えられた18例の肝組織像はほぼ正常ないし剖検例と同様の門脈域線維症であった。また肝内門脈枝の明白な閉塞所見は得られなかったが、門脈細枝における分枝過多を推定させる所見をみとめた。この所見は未だ記載されていない所見でありその意義は不明であるが、その形態発生的考察としては先天的形成異常、あるいは腫大脾よりの免疫学的ないしは門脈流入血量増大に基く小葉周辺肝細胞の緩徐な脱落による類静脈洞の血行路化を推論した。一方、脾組織像はこれらの3群間に決定的差異をみとめなかったが対照群に比較して静脈洞過形成が著明であり、鬱血は軽度の傾向があった。

次に本症候群の実験的作成と肝病変に及ぼす脾の影響を検討する目的で第二報において実験的検討を行

なった。

すなわち正常家兎に卵白アルブミン遷延感作を施行し、肝および脾の組織学的検索を行なった。ついで正常家兎および卵白アルブミン遷延感作家兎を正常家兎肝末ないし脾末、および卵白感作家兎肝末ないし脾末を用いて感作し、それぞれの肝および脾組織像を検索した。その結果卵白アルブミン単独感作においては脾腫と貧血および軽度の肝線維化をみとめた。しかしながらこれを臨床例と対比すると、白血球減少は著明でなく、また肝の多小葉性線維化、血管系の異常を作成しえなかった。また肝末ないし脾末を用いた実験においても、その肝および脾組織像は卵白アルブミン単独による遷延感作と同一所見であり、とくに肝線維化を促進せしめることは出来なかった。

断 案

本邦における Banti 症候群はその概念が漠然としているため、その実体について混乱を招いている。著者は剖検例生検例の検索より本邦においては各種検査によってもなお原因不明の脾腫性疾患、すなわち狭義の Banti 症候群とすべき症例の存在をみとめた。その肝組織像は主として肝線維症であり、とくに初期において肝内門脈枝に特異な所見をみとめることがある。本症の病因論は複雑かつ困難な問題であり、免疫学的操作により実験的に本症類似の病像を作成しうが、厳密には臨床例との間に相違点も存在し、その結論は将来の問題と考えられる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、今日その独立性および病因についてなお未解決の Banti 症候群に関して、臨床的病理的ならびに実験的に検討を加えたものである。著者はまず本症候群の診断のもとに剖検された12例、臨床的に肝脾生検により本症候群と考えられた18例、ならびに対照例として肝炎、肝硬変の18例および肝外門脈系疾患の5例について、肝、脾の組織像を詳細に比較検討の結果、脾の組織像には各群間に決定的な差異は認められないが、Banti 症候群と考えられた18例の肝組織像は、ほぼ正常ないしは剖検例と同様の門脈域線維症であり、また門脈細枝において分枝過多を推定せしめる特異な所見があることを明らかにしている。また本症候群の実験的作成をこころみ、卵白アルブミン遷延感作家兎、およびこれに肝末あるいは脾末感作を併用した家兎において、脾腫と貧血および軽度の肝線維化を認めているが、臨床例とことなり肝の多小葉性線維化、血管系の異常は認められないとしている。以上のごとく、本論文は本邦における Banti 症候群の存在を認め、その組織学的特徴を明らかにし、またその病因論に関し示唆をあたえたもので、Banti 症候群の本態解明に一知見を加えるものであり、医学博士の学位論文として価値あるものと認める。